
Winterな日々

HOLY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Winterな日々

【Nコード】

N9489B

【作者名】

HOLY

【あらすじ】

真冬の霜月市で出会った家出中の神無と放浪中（自称）のみずな。2人はいつしよに暮らすことになったが・・・？冬のあったかな物語

其の1 Coldな人生

少女は今、ものすごく後悔していた。

頬杖をついて窓の外を見つめるその顔はまゆを八の字に歪めた仏頂面で、せつかくの整った顔は台無し。茶色く染めた髪はパーマのかかったショートヘア。定期的に繰り返される深いため息。どこからどう見ても不機嫌そうなの少女に『近寄るなオーラ』を感じた他の乗客は、彼女から2メートルは距離をとっている。

「はあ・・・。」

すこしにぎやかな午後2時の電車の中、彼女のまわりの空気だけがえらく重い。

2月の上旬、季節は『真』がつく冬。外は晴れているが、それが町をさらに寒そうに演出して少女の心をさらに重くする。風にゆれる枯れ木を見て、朱宮神無^{あかみや かんな}17歳はつぶやいた。

「最悪の家出シーズンじゃない・・・。」

『近寄るなオーラ』さらに2割増しの神無をのせて電車は霜月駅へと向かう。

—●—

霜月市は郊外（のさらに郊外）にある中くらいの町。その中心部にある霜月駅周辺は霜月市における唯一の繁華街。しかし、そこから5分も歩けばすぐに畑が見えてくる。ここはそんな『田舎』1歩手前の町だ。

ひと昔前はそこそこに栄えていたのだけれど、ここ最近は過疎化

という逆から読んでも大丈夫な状況に陥っている。流行に乗っている、といえなくもないが、やっぱり人を集めたい市長は『レッツゴー ツー 田舎暮らし』という破滅的なスローガンをかかげて町おこしを企てる。そして予想通りに失敗、市長は辞任。しかし、そんな危機的事実を把握している市民は少数で、大半の市民はのんびりと普段の生活をエンジョイしていた。

そんな霜月市も、近くに高速道路が通るとかでやや力を取り戻してきて、駅前にも新しくビルが建つようになった。まあ、やっぱり5分歩けば畑なわけであるが・・・。

寒々しく晴れていた空に雲が顔を見せ始め、雪がちらつき始めた。今年は例年よりも寒さが厳しく、駅の茶色い屋根も白く染まっている。歩道は一応雪かきをしてあるが、もううつすらと雪が積もっている。霜月市は豪雪地帯とは無縁のポジションにあり雪も多いほうではないのだが今年はなぜか雪がよく降る。

コタツに逃げ込みたくなるような天気、せかせかと駅から出てくる人々。外回りも一段落ついて、これから会社でお茶でも飲もうかというサラリーマン。今日のおかずは何にしようかしら、なんて考え事をしながらスーパーに入っていく主婦。みんなマフラーに手袋と完全防備で暖かな目的地を目指す。でも、神無は目的地を目指して駅にいるわけではなかった。目的地などない。あえて言うのなら、目的地はここ、霜月駅。

*

電車を降りて改札を出る。何回か来たことあるんだけど、駅そのものの構造はあんまり覚えてないな。あ、ベンチ発見。

「しまったなあ。やっぱり寒いわこれ。」

霜月駅の中のベンチに座ると、外の刺すような空気におもわず身震いした。そしてさらに後悔する。あたしの格好はまさに高校生。

黒いブレザーに赤いリボン、地味なスカートに黒いソックス。オプションで茶色いマフラーと手袋をしてはいるけど、やっぱり寒い。この大きめのバックにカイロかなんか入れてくるんだった。うーん、もうちょっと考えて出てくればよかったなあ。ま、悩んでてもしょうがないよね。

携帯をみると、3時。ちよっとお腹もすいてる。軍事金はあるまり多くはないんだけど・・・うん、やっぱりなんか食べよう。寒さに耐えるにはお腹がすいてちゃダメだもんね。ちよっとこじつけど。駅を見回すまでもなく、目の前にはコンビニ。

「あ、店の中なら暖房がきいてるじゃん！」

せかせかとコンビニに入る。心なしかじらすように開く自動ドアを過ぎると、やっぱりあったかいー！

「はああ。」

文明の利器つてすばらしいなあ。エアコンを発明してくれたのはだあれ？

長期戦に持ち込むつもりだから、あんまり無駄遣いはできない。陳列棚をめぐる。

「あ、クリームコロッケサンド。おいしそうだけど、う、ちよっと高いな。蒸しパンもいいなあ。」

買わないけど、想像の中でいただきます。三色パン・・・。

約10分経過。腰を曲げて見ていたもんだから腰が痛い。それに、さっきから店員さんの目が気になる。別に急ぐわけじゃないんだけど、万引き少女とかに勘違いされたら嫌だしさっさと用を済ますかな。

カップ麺売り場に移動する。お財布と相談するならやっぱりカップ麺でしょ。安くて、お腹いっぱいになって、体も温まる。まさに一石三鳥！ちよっとかわいらしさに欠けるけど、今は意地を捨てて利を取りましょう！

一番安いしょうゆラーメンを買ってレジ横のポットのお湯を入れる。

「そういえば1人でこういうことするのは初めてかも。」

友達とはよくカップ麺を買って食べてたけど。・・・あ、どうしよう。なんか急に恥ずかしくなってきた。誰かと一緒なら周りの人の目とかは気にならなかったけど、1人だと、なんか、すっごい、恥ずかしい・・・。みんながこっち見てる気がする・・・。うーん。暖かいコンビニの中で食べたいのはヤマヤマだけじゃない、さっきのベンチに帰ろう。しょうゆラーメンと割り箸を両手に持つておらずとコンビニを後にする。

外に出るとひょうつと冷たい風が頬をなでる。

「うっわぁ・・・。さぶう。」

しょうゆラーメンの容器がほんわか温かい。しばらくこのままにしていたけど、のびたラーメンほど嫌いなものはない（かもしれない）ので、ベンチに座って食べるとしよう。

ずずず・・・。ずず・・・。この時間に駅を利用する人はそこまですくはなけど、当然少しはいる。そんなおばさん達とかが、『あらやだ。こんなところでカップ麺なんか食べて。』って言うてこっちを見ているような気がするよぉ・・・。恥ずかしいなぁ。ずずず・・・。これじゃあ外に出ても変わらないじゃん。コンビニの中で食べればよかったなぁ。まあ、いまさら戻って食べるのはもつと恥ずかしいけど。ずずず・・・。

目線を下にして、急いで食べきった。もちろん汁も残しません。

「さて、これからどうしよ。」

さっき見たら外は雪が降ってるけど、傘は買いたくないから駅から離れたくないし。ベンチでまた考える。今日は平日。駅には学校帰りの高校生をちらほら見かけるようになった。時刻は3時半。冬は日がくれるのが早いし、あんまりゆっくりしていられる時間じゃないな。

はつきり言っただけは、本当にピンチ。だって、今晚すら乗り切れるかわからないんだから。一番大切なことは、やっぱり今夜

泊まる場所を探すことだね。雪の中で野宿なんかしたくない。と言うか絶対死んじゃう。テレビで見たけど、マンガ喫茶に寝泊りする人が最近増えているらしい。それは確かにお金がかからなくて済むんだろうけど、ほぼ『田舎』の霜月にマンガ喫茶なんてないしなあ。カプセルホテルとかはあると思うけど。

「とりあえず、今一番大切なのはお金だね。」

お金が無くちやどこかに泊まることもできないし、ご飯だって食べられない。バックから財布を取り出す。

「1、2、3、4、・・・」

家を出る時、とりあえず持っているお金を全部持ってきたから、野口英世が6人、福沢諭吉が4人。樋口一葉はいない。しめて4万6千円。ちよつと心細いかな。軍資金は多いに越したことはないし。

「アルバイトを探さなくっちゃだなあ。」

霜月駅の周辺だったら仕事の一つや二つあるでしょ。よし、とベンチから立ち上がってバックをかつぐ。さっきのカップラーメンしようゆでお腹いっぱい、体も温まった。さあ、気合十分行きましようかあ！

「・・・あ、傘買わなくっちゃ。」

外はしんと雪が降っている。

*

「履歴書見せてくれる？」

「・・・え？」

アルバイト探しの手始めに駅前のファーストフード店に行ってみた。片付けをしていたお店の人に訊いたら事務室に通してくれた訳だけど、し、しまったあ。履歴書なんて頭の片隅にも無かったあ・・・。

「どうしたの？」

髪の毛が寂しくて、胸元の名札に「店長」と書いてあるおじさんが不思議そうにこっちを見てるっ。

「あああいや、その、えーっと、あはははは。」

分かってる！挙動不審に見えるのはよく分かってるんだけど、動揺しちゃいましたっ！

「朱宮さん？大丈夫？」

珍しいものを見ているような顔の店長さん。

「えっと、その、・・・失礼しましたあっ！」

ああもう、逃げちゃえ！

脱兎のごとく、事務室のドアを開けて走る！途中お客さんにぶつかりそうになったけど、かろうじてよけて傘もささずに店を後にする。

「ああもう！すっかり忘れてた！」

当分あのお店にはいけないなあ・・・。

結局さっきのベンチに戻ってきてしまった。

「天中殺・・・だっけ？今日は絶対それ。なんか後悔とか失敗とかめちやくちや多いもん。」

同じくさっきのコンビニで履歴書とボールペンを購入して書き込む。また出費が・・・。

「えーっと、朱宮神無・・・女。17歳、平成2年、1月27日。」
ベンチに履歴書を置き、自分は地面にしゃがみこんで書く。もう人の目なんかどーでもいいや。保護者の許可は・・・自分で書いちゃえ。

「あ、写真貼らなきゃ。」

駅構内を探してみると、入り口のすぐ近くに証明写真を撮る機械がちゃんとあった。げ、700円かあ・・・。高いなあ。でもしょうがない。撮らなきゃまたさっきみたいなことになるもんね。

作りつけの椅子に座ってお金を入れる。あ、マフラーははずさなきゃね。画面から女の人の声がする。

『写真の種類を選択してください。』

履歴書用、っと。

『枠の中に顔が入るように調節してください。』

画面に自分の顔と枠が表示される。枠は、ちょっと高い。身長150センチ弱のあたしにはきついかも。おしりを椅子から浮かせてなんとか枠にあわせる。ちょうど空気椅子をしてるみたいでかなりきつい。

『それでは、撮ります。動かないでください。』

がんばって動かないようにするから、早く撮ってー！

『……………』

お、遅い！足が震えてきた。

『カシヤ』

やっと撮ってくれた。ふ、ふう。

『……………これでよろしければ印刷のボタンを、取り直すならもう一度のボタンを押してください。取り直しはあと2回できます。』

「どれどれ？」

画面を見てみる。……………ぜんぜんよろしくない。顔全体に力が入ってしまってこわばっている。もう一度。今回は撮る直前に顔を枠に合わせよう。じゃないと、ホントにつらい。

『それでは、撮ります。動かないでください。』

まだまだ。……………よし、い

『カシヤ』

「え。」

枠に顔を合わせている真っ最中に撮られちゃった。なんで今回は撮るのが早いのか！？

『……………これでよろしければ印刷のボタンを、取り直すならもう一度のボタンを押してください。取り直しはあと1回できます。』

動いている最中に撮った写真はピンぼけしてなんか心靈写真みたい。

「あと1回かあ。」

もう700円も払いたくないし、絶対に失敗できない！空気椅子を意地でも我慢しなきゃ！

「……………あれ？」

ふと横を見ると張り紙がしてある。

「椅子の高度はこちらのレバーで調節してください」
最後の1回はどうしても楽に写真を撮ることができました・・・。

其の2 Suddenlyなお誘い

彼女は今、ものすごくわくわくしていた。

両手ををひざの上で組んで窓の外を見つめるその顔はまゆをすこし上げた笑顔で、きれいな顔をよりひき立てる。黒い髪はまっすぐ肩まで伸びていて、口にはうっすらと微笑が浮かんでいる。どこからどう見ても美人なその女性に『温かオーラ』を感じた他の乗客は、なんとなく彼女に近寄っている。

「ふふ……。」

すこしにぎやかな午後2時の電車の中、彼女のまわりの空気はさらに明るい。

2月の上旬、季節は『真』がつく冬。外は晴れて町をさらに寒そうに演出するが彼女の心は弾んでいる。風に舞う枯葉を見て、北條みずな20歳はつぶやいた。

「どんな所なんだろう？ 霜月町って。」

『温かオーラ』さらに2割増しのみずなをのせて電車は霜月駅へと向かう。



霜月町とは霜月市における唯一の繁華街の事を指す。といっても、霜月町の半分は畑のある『田舎』に属すが。

寒々しく晴れていた空に雲が顔を見せ始め、雪がちらつき始めた。駅の周りの街路樹も白く染まり始めている。

ストロブに当たりたくなるような天気、せかせかと駅から出て

くる人々。みんなそれぞれの目的地にむかっている。でも、みずなは目的地を目指して駅にいるわけではなかった。目的地などない。あえて言うのなら、目的地はここ、霜月町。

*

電車を降りて改札を出る。初めて来るけど、結構きれいな駅。あ、ベンチ発見。でも先客がいるみたい。

「こまったなあ、ちよつと寒い。」

霜月駅の中でうろろろしていると、外の刺すような空気におもわず身震いした。そしてちよつと後悔する。私の格好は黒いスーツに白いブラウス、さらに黒いスラックス。一言に言ってしまえば、リクルートスーツ。もうひとつおまけに白いマフラーと手袋。決して薄着ではないけど、今日はちよつと寒い。この大きめのバックにはカイロなんて入ってないし。まあ、しょうがないですね。

腕時計を見ると、3時。ちよつとお腹もすいている。手持ちのお金はあんまり多くはないんですけど・・・うん、やっぱりなにか食べましょう。寒さに耐えるにはお腹がすいてちゃダメですから。ちよつとこじつけですけど。駅を見回すまでもなく、目の前にはコンビニ。

「あ、お店の中なら暖かいですね!」

ちよつと急いでコンビニに入る。自動ドアをくぐると、やっぱりあったかい!

「なににしようかな?」

コンビニの中を見渡す。パンコーナーに行ってみる。あ、蒸しパンおいしそう。でも、できれば体が温まるものがいい。それになにか女子高生棚にかじりついて近寄りづらいし・・・次にカップラーメンのコーナーも目に入る。あ、カップラーメンなら温まるし、お腹はいっぱいになるし、安いし、まさに一石三鳥。あ、・・・うーん、でも外で食べるのはちよつと恥ずかしいかな。諦めましょう。

「あ、ちょうどいいものがありました！」

この季節の定番、レジの横に必ずあるもの。そう、肉まん。これなら体も温まるし、お腹も膨れる。カップラーメンに比べるとちょっと高いですけど。

「肉まんを2つください。」

「はい。220円です。」

男の店員さんは明るく答えてくれた。胸には研修中の名札。がんばってください。

外に出て、冷めないうちにとさつそく肉まんをほおばる。熱い！

「さて、これからどうしましょうか。」

さつき見たら外は雪が降っていた。傘は持っているけどあんまり歩き回りたくはないし。ベンチでまた考える。今日は平日。駅には学校帰りの高校生をちらほら見かけるようになった。時刻は3時半。冬は日がくれるのが早いし、あんまりゆっくりしていられる時間じゃないですね。

はつきり言って私は今、そこまで緊迫はしていない。だって、安いホテルなら何日か泊まるだけのお金はあるし。でも、今後のことを考えるとお金を稼ぐ必要がある。雪の中で野宿なんかしたくない、と言うか絶対死んじやいます。テレビによると、マンガ喫茶に寝泊りする人が最近増えているらしい。それは確かにお金がかからなくて済むんだろうけど、できればアパートに住みたいですし。

「とりあえず、今1番大切なことはアルバイトを探すことですな。」お金が無くちやどこかに泊まることもできなくなるし、ご飯だって食べられなくなります。駅の周辺だったら仕事の一つや二つあるでしょう。よし、とベンチから立ち上がってバックをかつぐ。さつきの肉まんでお腹いっぱい、体も温まった。さあ、気合十分行きましよう！

外はしんと雪が降っている。黒い傘をさして街を歩く。

どこの駅の周辺にもあるもの。コンビニ、銀行、そしてそば屋。

この霜月駅も例外ではなく、『和親庵』という看板を掲げたそば屋があった。仕事探しを始めて約2分で見つけたそのそば屋さんは、駅の出口のすぐ隣りでお客さんを集めやすい位置。そして、その自動ドアには『急募』の張り紙。さっそくお仕事が見つかりそうな予感がします。

「いらっしやいませー。」

中に入ると、結構きれいな内装だった。お客は時間的に少ないが、確かに店員さんは忙しそうに仕事をこなしている。お皿が残ったテーブルを台拭きで拭きながらこっちに声をかけてくれた。

「お好きな席にどうぞー。」

目測40代前半のおばさん。パーマをかけた髪で白いエプロンが良く似合っている。

「あ、あの、私はお客さんじゃなくてですね、外の求人の張り紙を拝見したんですが。」

すこしきりつと返事をする。第一印象はとっても大切なんです。

「あら、うれしいね。ちよつと、こっちに來て。」

ぱつと顔をかがやかせたおばさんはさっそく私をお店の奥に案内してくれた。そして厨房に声をかける。

「陸奥さん。今、手空いてるー？」

どうも店長さんと呼んでいるらしい。ちよつとすると、やっぱり白いエプロンを着たおじさんが厨房から出てきた。目測・・・50代の前半ですね。

「どうしたの？あれ、可愛い娘だね。お客さん？」

こちらにも気さくな感じ。なかなかの好印象です。求人への張り紙を見た、と説明するとやっぱりとても嬉しそうな顔をしてさらにお店の奥に案内してくれた。

事務室兼休憩所、そんな感じの部屋。部屋全体は広くはないけど

片付いていて、くつろぐにはよさそう。だけど、事務机の上は伝票やらノートやらでごちゃごちゃしている。あのノートにはレシピと書いてあり、その下にはマル秘マーク。そんなところに出しておいていいんですか？

「さ、座ってください。」

言われるままに机のそばのソファに座る。ふつくらといい座り心地。陸奥さんと呼ばれた店長とおぼしきおじさんは、事務机とセツトの回転椅子に腰掛けて話を始めた。

「私が一応この店長、陸奥です。よろしくね。」

「北條みずなと言います。よろしくお願いします。」

「私はあんまり事務的なことって嫌いだから本当は面接だけで決めちゃいたんだけど、葉月さん^{はづき}がうるさくってね。あ、葉月さんてのはさっきの人ね。パーマをかけた人。」

どうも店長は葉月さんに頭があがらないらしい。今のは内緒だよ？なんて言ってる。

「だから、ちょっと履歴書を見せてくれるかな。」

「ちよつと待ってください……。はい、どうぞ。」

もちろん履歴書の準備は完璧です。誤字脱字なんかありません。多分ですけど。

「ふんふん。はい分かりました。」

履歴書を読み始めて、もとい、ながめ始めてのほうが適切ですね。10秒もしないうちに終わってしまったんですから。

「え、あの、もういいんですか？」

「ははは。だから、嫌いなんだってこういうの。形だけ形だけ。」

そう言つて、今のは葉月さんには内緒だよ？なんて付け加える。

「はあ。」

そんなあ。結構な時間をかけてがんばって書いたのに……。

「それより面接をしましょう。ね？」

「……はあ。」

なんだかすっかり気が抜けてしまいました。

店長はもとより私を落とす気はなかったらしい。話し始めて10分ぐらいで「北條さん、採用するね。」と言われて、そのあとは2時間弱、葉月さんが「長いですね」てようすを見に来るまでずっと世間話などをしていた。いわく、店長はボーリングが好きでよく行くとか。いわく、行きつけのボーリング場はネットをつけて球がガーターに落ちないようにできて、それを使って球をバウンドさせながら投げるのが楽しいとか。だから何なんでしょうか？

最後にやっとそれらしい話が出た。

「うちはシフト制でやってるんだけど、北條さん、いつ入れられる？」

そう言つて店長はシフトの表を見せてくれた。金曜はお休みで、あとの日は朝、昼、夜の3つに分けられている。

「基本的に全部大丈夫ですから、空いてるところに入れちゃってください。」

「そう？助かるなあ。……って、あれ？北條さん、20歳だよね。大学生じゃないの？」

あ、やっぱり疑問に思います？

「違いますよ？今はちよつと、諸事情で放浪してるんです。長いんで説明は省きますけど。」

で、やっぱり頭の上に「？」を浮かべる店長。

「放浪？……って、あの放浪？」

「あの放浪です。」

数秒動かなくなる店長。あー、思考回路が停止してますね。まあ、今までにこのことを話した人はみんな同じ反応でしたから、安心してください。

「はははは。面白い人だね君は。」

「あはは。やっぱりそう思います？」

でもってみんな嘘だと言う。ちなみに、紛れもない真実なんですけど。

「まあいいや。じゃあ、こっちがシフト組んじやっていいのね？」

「はい。お願いします。」

過労で倒れない程度にですけどね。

「当分は接客をやってもらうけど、それでいいかな？」

「わかりました。任せてください。」

「お、頼もしいなあ。じゃあ、とりあえず今日はこれで終わりと言うことで。明日は金曜日で定休日だから、あさってからお願いね。」

と言うことで事務室兼休憩室（社長室って呼ぶらしい）を後にして外に出る。途中、葉月さんが手を振ってくれた。

「じゃあ、よろしくね。」

外まで見送ってくれる店長。高感度アップです。

「はい。あ、連絡先ですけど、私の携帯電話の番号をお教えしないでいいんですか？」

ふと気がついて訊いてみると、うろたえる店長。

「あ、ああー！そうか、すっかり忘れてたよ！」

・・・信頼度ダウンです。

*

外はもうすっかり暗くなっていた。腕時計を見ると5時過ぎ。刺すような寒さはさらに増しているが、雪はもうやんでしまっていた。それでも降った量は多かつたらしく、5センチぐらいは積もっている。にわか雪とでも言うんでしょうか？

「あんなに長引くとは思いませんでした。早く泊まる場所を探さないといけませんね。」

野宿はいやです。凍傷は痛いらしいですから。

マフラーをきゅつと締めて、当たりを見回す。さっき言った駅の周辺に必ずあるものにもうひとつ。交番はやっぱり駅のとなり、和親庵から駅をはさんだ反対側にあった。おまわりさんはちゃんと中にいる。

「すいませーん。ちょっとよろしいですか？」

声をかけると、机で日誌をつけていた強そうなおまわりさんが顔を上げる。

「はい、なんでしょうか？」

「この辺で、一番安いカプセルホテルはどこですか？」

おまわりさんはうーむとうなったあと、答えてくれた。

「そうですね。この辺も最近また栄えてはきましたけど、カプセルホテルは選ぶほどの数ないですよ。残念ながら。」

まあ、ぎりぎり『田舎じゃない』だからしょうがないと言えばしょうがないですけど。

「ま、あえて言うならノーベンバーっていうカプセルホテルが一番安くて新しいですかね。場所はここからだ、駅をはさんで反対側です。でっかい看板がありますから、すぐ分かりますよ。」

「ノーベンバーですか。ありがとうございます。」

分かりやすい名前。

「しかし、治安のいい霜月とは言え、あなたのような若い女性がカプセルホテルと言うのはお勧めできませんな。」

模範的なことを言うてくれるおまわりさん。しかしながらこっちは他にあてもお金もない。贅沢は言ってられないし、自分の身ぐらい自分で（多分）守れる。

「ご心配どうも。」

そう言って交番をあとにする。

「あ、そうだ、晩御飯はどうしよう。」

肉まんを2つ食べたからお腹は減っていないけど、やっぱり食べておかないとつらい。和親庵でついにおそばでも食べておけばよかったですね。あとの祭りってヤツですけど。さっきのコンビニで弁当を買うことにした。

おにぎりとサンドイッチを買ってコンビニから出る時、みずなはこの駅に着いた時にも見た少女がまたベンチに座っているのに気がついた。黒いブレザーに茶色いマフラー。そう、朱宮神無^{あかみや かんな}だった。その少女がひどくしょんぼりとしているように見え、みずなは声をかけてみた。

「どうしたんですか？」

いきなり話しかけられた神無は一瞬驚いたが、返事を返す。

「えっと、誰ですか？」

「私？私はみずなっています。北條みずな。今、放浪の身で、霜月町は今日が初めてなんです。」

あつけらかと話すみずなに警戒心というものを吸い取られた神無は、自分でも驚くぐらい素直に答えた。

「あたしは、朱宮神無。霜月町は初めてじゃないけど、・・・その、今日家出してきた。」

「そうなんですかあ。私達、似たもの同士ですね。」

あははと笑うみずなを神無はうつとおしく思い始めた。実際、彼女はそんな笑えるような状況ではなかった。

「神無さん？ずばり言ってもいいですか？」

「・・・？どうぞ。」

「ずばり、家出をしてきたものの、今日寝るところも確保できていなくて、途方にくれている。どうですか？」

どんぴしゃの超凶星。まさにその通りだった。

「な、・・・そうですね、だから何ですか。その交番に突き出すんですか？」

「まあまあ、そう怒らないでください。私も一人で寂しいんですよ。うするに、今晚いっしょに泊まりませんか、と言う話なワケで。そうすればほら、お互いに半額で済みますし。」

突然の、しかも見ず知らずの人からの誘いに困惑する神無。

「・・・どういうことですか。」

「だから、今晚いっしょに泊まりましょう、と。そうすれば部屋は狭くなりますけど、お互いお金が節約できますし私は寂しくなくなつて、あなたはとりあえず家に帰らなくて済む。いかがですか？あちなみに寝込みを襲おうなんて考えてませんし、変な趣味もありませんから安心してください。」

「・・・。。。」

それは神無にとって悪い話ではない。実際、さっきまでものすごく悔しいけど家に帰ろうかとも思っていたのだ。まあ、みずな、とかいう人はそんなに悪い人にも見えないし、こんなところで凍え死にたくもない。

「じゃあ、・・・よろしくお願いします。」

其の3 Surpriseな夕食

今日びの女子高生とはいえ神無は田舎に属する高校に通っているわけで、当然カプセルホテルなんていうものは噂でしか聞いたことのないものだったわけで。カプセルって言うぐらいだからちよつと狭そうだなあ、なんて思っていたわけだが・・・。

—●—

「・・・うえ？」

思わず情けない声が漏れた。

「どうしたんですか？」

「・・・その、狭くないですか？」

「狭いですね。」

この人はなんでもないことのように返してくるけど、本当に狭いんだってば！1人でも寝返りを2回うつるかうてないかなのに、2人で入る！？圧迫死するって、絶対。

「いいじゃないですか。本来3000円のところを1500円で超特価ですよ？安いモンです。」

その代償がかなり大きい気がする。

本来は（というか、当然）1つのカプセルには1人までしか入ってはいけないうらいが、この人いわく「田舎のほうのカプセルホテルはちよつと広めだし、警備員さんもなまけてますから大丈夫です。」とか。にしたって狭いでしょ。あたしの座高より低そうな天井では一度入ったら出るのも大変そう。

「あ、あつちにロッカーがありますね。荷物、置いてきちゃいましょう。」

指差すほうを見ると、カプセルがずらつと並ぶ廊下の一部が確かにコイン式ロッカーになっている。わりと新しく綺麗なこのカプセ

ルホテルになぜか緑色の塗装がはげかけたロッカー、それがまたあたしの心をずうんとさせる。

ぎいぎい。これまた錆びれた音を立てて開くふた。

「よいしょっ……んっ、んっ！」

そしてまた何か意味不明なことを始める人。えらくがんばってバッグをロッカーの奥のほうに詰め込もうとしている。何の意味がある？

「あの、」

「ほら、あなたの荷物も入れてください。」

あたしの質問をさえぎってとんでもないことを言う。

「な、なんでですか！？別々のところに入れればいいじゃないですか！大体、2つも入りませんかよ！」

抗議をしてはみたが、なぜかこの人は不思議そうな顔をする。あたし、的外れなことを言った？

「だってほら、ロッカー代も半分こ出来るじゃないですか。」

「そ、そこまでしなくても……。ただか百円じゃないですか。」

「なに言ってるんですか。100円を笑う者は100円に泣くんです！さ、荷物を貸してください。」

しぶしぶ荷物をわたす。あああ、いろいろ入ってるのに……。。

「……あれ？」

いま、ふとコインロッカーの説明書きが目に入った。

「ちよ、ちよっと！このロッカー、お金返ってきますよ！？」

「え？あ、ホントですね。あはは。」

そして、あたしのバッグは体積3分の1になって開放された。そもそも、百円玉をどうやって半分にしようと？

「あつちは休憩室みたいですね。」

それぞれの荷物にゆったりとした空間を提供した後も、休むことなくホテルの探索じみたことが続けられる。

入り口からカプセル群をはさんだ反対側は広めの部屋になってい

て、自販機やらソファーやらテレビやらが置いてある。ちょうど温泉の待合室みたいだ。

「そっちにはシャワーですね。あとで浴びましょう。」

「・・・一緒に、ですか？」

恐ろしいので一応訊いてみる。はい、とか言われたら逃げ出してやる。

「はい。節約ですから。」

「・・・。」

ぞわぞわと背筋に何かが走る。具体的にはでつかいムカデ。ダメだこの人、絶対に変な趣味がある。お嫁にいけない前に逃げよう・・・。

「なんて、冗談ですよ。」

「え。」

しかし半信半疑。

「シャワーはサービスでお金がかかりませんから、存分に浴びてオツケーですよ。」

「な、なあんだ。信じちゃったじゃないですかー!」

あはははは。いや、ほんとに。

「一緒に入りたいんですか？」

「断じて否いなです。」

きっぱり。

「うーん。ちょっと残念です。」

それにしても、シャワー使い放題なんだ。もう当分シャワーなんて浴びれないだろうなって覚悟してたし、ちょっと感動かも。カプセルホテルってすごい。

「でも、普通入浴も出来るものなんですけどね。ちょっとここはレベルが低いようです。」

そしてその感動を木っ端微塵にしてくれたこの人。

「・・・。そんなにカプセルホテルよく使っんですか？」

ちよっと固めのソファーにばふっと座って訊いてみる。

「そうでもないですよ？今日みたいに新しい土地に来てすぐの時だけですから、回数で言うとは多くはないですね。」

ああ、そういえば新しい土地だって言ってたな。

「いろんな所に行ってるみたいですけど、仕事の関係で転勤が多いとか？」

「残念。ハズレです。」

「じゃあ、なんでですか？」

「ふふふふ。」

いきなりにやりと上目づかいで見つめられた。

「・・・知りたいですか？」

「はあ、まあ。」

興味はあるし、その怪しい表情も気になるし。

「私のことが、そんなに知りたいと？」

「はい、知りたいです。」

「まあ！」

なぜか急に頬を赤らめてキヤーキヤー恥ずかしがるこの人。

「いやですね！そんなに私のことが気になるだなんて！私、そっちの気はないんです！」

意味不明だし。あんたに言われたくないし。

「・・・じゃあいいです。」

「あ、つまないと言いますね。まあ、いずれにしろ自己紹介もまだですし。」

「・・・あ、そういえば。」

すっかり忘れてた。そんな基本中の基本も忘れるほど動揺してたんだろうか。いろいろと。

「お腹もすいたことですし、晩御飯を食べながらお話ししましょう。」
「そうですね。」

携帯を見ると、6時。さっきのカップ麺であんまりお腹はすいていないんだけど、食べるでしょう。

「私は北條みずなっついていいいます。」

食事&自己紹介をはじめ。休憩室にはあたし達2人以外は誰もいない。もつと遅い時間になるとちらほら人が来るようになるんだとか。

「朱宮神無です。よろしく。」

この人ともいみずなさんにわけてもらったおにぎりを食べる。あたしだってちゃんと夕食用にカップ麺を買っておいたわけだけど、さつきロッカーに押し込められた時に原型を失ってしまったんで、みずなさんのご飯を半分こしている。「神無ちゃんね。高校生?」

「はい、一応。無断休学中ですけど。」

「家出?」

この人はまたえらい率直に聞いてくるな。自販機で買ったお茶を飲んでおにぎりを流し込む。

「初日です。」

「親御さんとけんか、とかですか?」

「・・・まあ、そんな感じです。」

うんうんとうなずいてこんなことを口にするみずなさん。

「そっかー。がんばってくださいね。親が謝ってくるまで帰っちゃダメですよ?」

なんじゃそりゃ!? 普通、親を心配させちゃダメですよーとか言うもんじゃないの?

「・・・みずなさん、いくつですか。」

「私ですか? ぴったし20歳ですよ。お酒もタバコもオッケーです。」

「そっかー、20かー。あたしの3つ上かー・・・って、

「20歳!? そんなに若いんですか!?!」

びっくりして失礼なことを口にしてしまう。いや、でも、絶対30近いとばかり・・・。

「うふふ、よく言われます。でもれっきとした二十歳はたちですよ？」

驚愕の事実……。あたしと3つしか違わないのに、この大人びた口調、堂々とした行動。確かに肩までの黒髪が年齢を高く見せるけど、顔を見ると……。若い。

「私と神無ちゃんは3つしか違わないですよ？だから敬語とか使わないでください。」

「……。え？だって、3つ上のみずなさんはめっちゃめっちゃ敬語じゃないですか。」

「いいですよ、私はこのほうがいいんです。でもって敬語を使われるのは嫌なんです。ブラザーソウルって言うんですか？私のことはみずなちゃんをお願いします。」

なんの脈絡もなく出てきたブラザーソウル。女同士なんだけどなあ。サンドイッチをがばつと口に押し込んで、時間を稼ぐ。もちろんその言葉を口にするまでの時間を。

しかし、時は無常に過ぎ去った。そしてついにその名を呼ぶ。

「……。みずなちゃん。」

この違和感の海の底のほうからやってきた言葉にみずなちゃんは嬉しそうにうなづく。

「みずなちゃんは、なんでいろんな街に行ってるんです……。の？」

あああ、話しづらーい。

「私、放浪の身なんです。」

「……。放浪？ってあの放浪？」

それって時代劇とかの話じゃないの？

「その放浪です。ここ！っていう場所が見つかるまで旅をしてるんですね。いままでなかなか良い土地に巡り合えなくて、この霜月市は4ヶ所目なんです。」

「……。は、ははあ。」

変な人だと思ってたけど、実はすごい変な人だったのか……。

「でもやっぱり1人は淋しくてですね。神無ちゃんみたいなコにいつい声をかけちゃうんです。」

ふつとみずなちゃんは悲しげな顔をする。・・・その顔は、女のあたしが見ても綺麗だった。

「みずなちゃん・・・。」

「と、言うわけで、もし無計画な家出だったんならしばらく一緒にいてくれませんか？神無ちゃん？」

「いえ、こちらこそ、その、よろしく。」

「うふふふー。そう言ってくれると信じてましたよー。普通、気味悪がって断るんですけどねー、神無ちゃん変わり者ですね。」

あんたが言うな、あんたが。さっきの暗い顔はどこにすっ飛んで行ったのか、一転して笑顔爛漫。まあ、無計画な家出だけどさっ。

食事が終わった後に「放浪って、冗談？」って訊いたら「うふふふー。どうでしょう？」とはぐらかされてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9489b/>

Winterな日々

2010年10月15日20時21分発行